

# 博士學位論文

内容の要旨及び審査結果の要旨

(平成 31 年度 3 月授与関係分)

第 23 号

神戸女子大学

# は し が き

本誌は、学位規則（平成25年3月11日文部科学省令第5号）第8条による公表を目的として、平成31年3月16日、本学において博士の学位を授与した者の論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を収録したものである。

# 目 次

## 論文提出によるもの（論文博士）

(学位記番号)	(氏 名)	(論文題目)	(ページ)
文博乙第 10 号	湯 谷 和 女	ジェイン・オースティン ー風刺作家としてのモラリスト	1

氏 名 ( 本 籍 )	湯谷 和女 (兵庫県)
学 位 の 種 類	博 士 (英文学)
学 位 記 番 号	文博乙第 10 号
学位授与の年月日	平成 31 年 3 月 16 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当 文学研究科 英文学専攻
論 文 題 目	ジェイン・オースティン —風刺作家としてのモラリスト
論 文 審 査 委 員	主査 教授 丸橋 良雄 副査 教授 木村 恵子 副査 教授 永渕 朋枝 副査 京都大学大学院 教授 廣野 由美子

## 論文内容の要旨

本論文は、王政復古期の喜劇である *comedy of manners* の手法を取り入れて小説を書いた Jane Austen(1775-1817)を風刺作家としての *moralist* と捉え、‘a master of her craft’ と称賛される彼女の小説技法がどのように完成されたか、その過程を研究したものである。本論文の目的は、代表作のみならず代表作を生み出すに至った未完小説や小品、さらには国内では入手できないような二次資料等もすべて綿密に検証し、その上でオースティン小説の成立と変遷と発展を一直線上に捉えて提示することである。

本論文は全二十章からなり、第一章から第十章までは作品ごとにテーマを定めて考察し、第十一章から第十六章までは全作品を鳥瞰しつつ、さらにテーマを拡大して作品と対峙し、第十七章から第二十章はイギリスに行き *The Jane Austen Society of the United Kingdom* が主催する国際会議に参加し、オースティンの足跡を辿って得た貴重な資料と着想を基にオースティン小説の全体像に迫った。以下各章の要旨を簡潔に述べる。

### 第一章 ジェイン・オースティンの女性観—『説得』に関する一考察—

オースティンの小説の特質を踏まえた上で、作家の新しい境地が開かれているといわれる最後の完成小説である *Persuasion* において、彼女の人生観がどのように変化しているかを精査した。この作品が他の 5 作品と異なるのは物語の複雑さとプロットの構成で、過去

の記憶と現在の状況を交差させて一層複雑な構成に仕立てていることである。理性と情熱を併せ持つ Anne Elliot はオースティンの最も優れたヒロインといわれ、オースティンの女性観はこのヒロインに集約されているとの結論に達した。

## 第二章 本格的小説の最初の試み—『キャサリンまたは東屋物語』—

Juvenilia (少女期の作品集) のうちオースティンが17歳の時に書いた未完小説である *Catharine, or the Bower* を取り上げ、この小説を本格的創作に転じる過渡期の重要な作品と捉えて論を展開している。その根拠は、① dramatic dialogue の萌芽、② 失敗から学ぶ成長するヒロインの創造、③ オースティンによる novel of manners の成立が認められる点であると論じた。

## 第三章 キャサリン・モーランドの目覚め—流行小説のパロディからオースティン文学の創造へ—

少女期の手法が色濃く残されている点から、創作年が不明の *Northanger Abbey* を完成小説の第一作目と考え、ゴシックロマンスのパロディとして書き始められた本小説に於いて、ヒロインを流行小説の枠に閉じ込めずに、「日々の生活の中で学ぶ」成長するヒロインを創造した点に注目した。

## 第四章 『分別と多感』における個と社会の関係

ここでは *Sense and Sensibility* で問題視されている個と社会の関係、ひいては結婚と社会の関係について論じた。本作は大別して二つのグループから構成される。一つは階級制を重んじ物欲にとられる利己主義者のグループと、もう一つは地位に固執せずに社会に対して責任ある行動を取る実直な人々のグループである。後者の人々により社会は秩序が維持される。オースティンの場合、個と社会は互いに依存する関係にあり、結婚はヒロインの自己実現の達成であると同時に、社会もヒロインの結婚により活性化されて社会と結婚の関係に調和が保たれ、相互に高めあっていると結論づけた。

## 第五章 『自負と偏見』に於けるオースティン文学の新しさ

オースティン文学の新しさは、イギリス小説の伝統を踏襲しながら全知の語り手と、登場人物同士の会話と、人間関係のねじれを正すために挿入される書簡により作者独自の叙述法を完成させたことである。この点に留意し、本小説の新しさを以下の4点に絞って論じた。

1. 登場人物の会話をモチーフにドラマ化されている点
2. 柔軟な心を持つ進歩的な女性の創造
3. 新しい時代のニーズに合った新しい小説技法を編み出した点
4. 19世紀の社会が抱える新しい問題を問いかけている点

## 第六章 『レイディ・スーザン』—書簡体から叙述法へ—

修正を施された原稿には1805年と書かれているが、これをオースティン前期の代表作に至る1794~97年頃の小説と仮定し、書簡体と訣別するため書かれた大胆な実験的小説という観点から論じた。実験的小説と判断したのは、①ヒロインである Lady Susan

の性格の悪さはヒロインとしての資質に欠けること、②書簡体で始められるが、收拾がつかなくなり最後は叙述法で唐突に締めくくられていることである。ここから、本小説は書簡体の限界を確認するために書かれた実験的小説であるとの結論に達した。

#### 第七章 『ワトソン家の人びと』から『マンズフィールド・パーク』へーオースティン文学の分岐点ー

『レイディ・スーザン』を前期の代表作に至る過渡期の小説と位置付けたように、本小説を十年余りのブランクを経て書かれた後期の代表作に向かう転換期の実験的作品と捉えて論じている。父親の死、その後の経済的不安と相次ぐ転居といった人生の辛酸を経験したオースティンが、人生の厳しい現実に向き合うヒロインを自分の小説にどのように適合させるかという課題にチャレンジし、成し得たことと成し得なかったことを類別し、本作が後期の代表作にどのように繋がっているかを考察した。

#### 第八章 ファニー・プライスに課せられたもの

後期の代表作と言える *Mansfield Park* のヒロインである Fanny は不安げで傷つきやすい人物として造形されている。このような逆境にあるヒロインの描き方として考え出された方法は、①内省するヒロインにすること、②ヒロインの目の色と容色を抑えることである。本作品で試されたこの技法はまだ開発途上で、最後の作品である『説得』でこの技法が完成することになる。

#### 第九章 ハイペリーの女主人となるために

祝婚ムードに包まれる本小説で、意外にも重要なのは「女性同士の友情」である。初期の作品の中で主題としてよく取り上げられた *love and friendship* という視点から作品を分析する。村には Emma のよきライバルであり彼女と同年齢の Jane がいるにもかかわらずエマはジェインを遠ざけ、社会的優位性が享受できる友人の Harriet と付き合う。ハリエットとジェインの二人の女性を通してエマの教化が図られ、予期せぬ結果に結びつくが、本論文ではその経緯を論じた。

#### 第十章 真実性の追求ー『サンディトン』に見られる新しい方向性ー

オースティンの遺作の *Sanditon* を創作の転換期の実験的作品と捉え、一見初期の作品のバーレスクに戻ったかのようなドタバタ喜劇を思わせる本作品で、作者は不治の病であるアジソン病（副腎皮質機能不全）と闘いながら、開発中の保養地の混乱、無秩序、誤情報、仮病、真の会話の欠落、加熱する商業主義など、後に19世紀の作家が扱うことになるモチーフに作者が早くも着手していることに注目した。

#### 第十一章 オースティンと読書

オースティン一家は大の読書家であった。ジェインも読書を重要視し、登場人物の欺瞞性を暴く手段として、または登場人物の人間性を読者に教える有効な手段として読書を用いた。ここでは『分別と多感』の Thorpe 兄妹、オースティンの小説の中で第一級の喜劇的人物である『自負と偏見』の Mr. Collins、『エマ』に登場する自由農民の Mr. Martin を取り上げて、彼らの愛読書が個々のイメージとどのように結びつけられているかを検証した。

## 第十二章 オースティンと読書（その二）

前章につづきオースティンと読書の関係をさらに深く掘り下げて論じた。Dr. Johnson の “the literary merits of the *dulce et utile*” (*Rambler*#4) という考えを受け入れて創作したオースティンは、『マンスフィールド・パーク』の中で “reading, which, properly directed, must be an education in itself” という持論を展開し、読書を怠る『エマ』のヒロインには多事多難の人生を用意する。オースティンの創作と読書は切り離せない関係にあることを作品や言及された文献により例証した。

## 第十三章 ジェイン・オースティン—風刺作家としてのモラリスト—

Henry Fielding が王政復古期の *comedy of manners* を小説という文学形式に当てはめて *novel of manners* とし、オースティンがこれを継承したが、Walter Allen はこの二人の小説家を指して “the moralist as satirist” と呼び、さらにオースティンについて “she was the last and finest flower of that century at its quintessential” とまで称賛した根拠を解明した。

## 第十四章 オースティンの小説に描かれた親と娘について

オースティンが生涯を過ごしたのは社会情勢が著しく変化した時期である。この時代に、家庭生活では家父長制の古い価値観と個人主義の新しい価値観が共存から対立するようになり、両親と娘の関係もそれまでの溺愛と束縛から放任へと変化していく。このような時代の変化に順応できない親と、自力で人生を切り開いていく娘との親娘間の葛藤と相克を論じた。

## 第十五章 オースティンの小説の変容—対立する二つの概念の融合—

本章では、古典主義の概念に縛られて窮屈さや堅苦しさが認められた前期の作品からその枠組みを拡大し、制限が緩やかになる後期の作品に至るまでのオースティンの小説が変容していく様子を精査し、最後の小説である『説得』の中で古典主義とロマンティシズムの自然な融合が可能となり、作者の完成された小説技法を綿密に分析した。

## 第十六章 オースティンの作品にみられる登場人物の体調不良について

18世紀から19世紀にかけてイギリス社会は産業革命の渦に巻き込まれ、その余波を受けて人々は心身ともに疲弊し、国王自身も神経症で苦しんだ。このような時代の転換期に、伝統的な思想と新しい思想の板挟みになって苦しむ人々の精神的負荷が登場人物の体調不良として表現されていることに着目し、体調不良である登場人物のジレンマを探り、その体調不良は何に起因しているのかを探っている。自立心旺盛な娘の断固とした主張に抗しきれない『自負と偏見』の母親はたびたびヒステリーをおこし、嫁いだ娘の価値観を受け入れることができない『エマ』の Mr. Woodhouse は *hypochondria* (心気症) を患う。登場人物が抱える心と身体のアンバランスから起こる体調不良について論じた。

## 第十七章 オースティンと田園風景

本章ではオースティンと彼女の小説と田園風景の関係について考察した。“God made the country, and man made the town.” といって自然を礼賛する William Cowper のよう

に、オースティンも終生生まれ育った南イングランドの田園を愛し野山を歩き回った。オースティンはクーパーの自然詩、とりわけ *The Task* を愛誦し、彼女の庭の植栽も、第六巻の “The Winter Walk at Noon” の一節に出てくる草花を選ぶほど、クーパーの詩はオースティンの生活に溶け込んでいた。オースティンの創作の源泉である南イングランドの田園風景と彼女のつながりについて論じた。

#### 第十八章 オースティンとケント

本章は、1999年に The Jane Austen Society of the United Kingdom が主催する国際会議が Kent で開催され、そこで収集した資料にもとづいて作成した。主としてオースティンとケントのつながりについて述べており、内容は、① オースティン一族の歴史とケント、② ジェインの父親の George Austen とケント、③ ジェインの三兄の Edward と Knight 家、④ ナイト家所領の Godmersham Park とオースティン一家、⑤ エドワードと彼の妻の Elizabeth Bridges、⑥ ブリッジ家が所有する Goodnestone House、⑦ グッドネストーンとジェインとの関係について論じた。

#### 第十九章 オースティンとハンプシャーの港湾都市

前章に続き本章も、2001年に Southampton (Hampshire) で開催された The Jane Austen Society of the United Kingdom の国際会議に参加し、そこで得た資料と情報にもとづいて作成した。主としてハンプシャーの二大港湾都市のサウサンプトンと Portsmouth とオースティン家のつながりについてまとめたものである。①サウサンプトンの歴史と背景、②ジェインが一時期暮らした Castle Square の借家と、その借家を所有した The Marquess of Landsdown、③軍港のポーツマス の歴史と背景、④オースティン一家とポーツマスのつながり、⑤『マンズフィールド・パーク』に描かれたポーツマス、という五つの視点から考察した。

#### 第二十章 オースティンとライム・リージス

本章も引き続き2003年に Lyme Regis(Dorset) で開催された The Jane Austen Society of the United Kingdom の国際会議で入手した資料と情報に基づいてまとめた。具体的には、①ライム・リージスにつながるイギリスの作家、②ライム・リージスの歴史と歴史的背景、③Mary Anning の化石発掘とライム海岸、④海岸保養地の開発とライム・リージス、⑤オースティン一家とライム・リージス、⑥遺作の『サンディントン』と海岸保養地の開発、⑦『説得』に描かれたライム・リージスとオースティンとの強い結びつきと、その根拠を解明した。

## 論文審査結果の要旨

湯谷和女氏は博士論文に代わるものとして単著『ジェイン・オースティン—風刺作家としてのモラリスト』を昨年11月に出版した。目次・参考文献等も含めて総頁数は392頁にも及ぶ大部の著作であり、全二十章から成り立っている。対象となるのは一貫して18世紀後半から19世紀前半にかけてイギリスの近代小説の礎を築いた Jane Austen (1775-1817) という女流作家の作品研究であり、これまで執筆された20編の論文に適宜加筆修正を施した、湯谷氏の実に30年にも及ぶ研究の集大成である。

オースティンの完成作品は6作あるが、これらの主要作品を中心に、少女期の作品集から文学手法の転換期に書かれた中編小説や未完小説に至るまで一貫してオースティンの全作品に渡って研究している。具体的には、少女期の作品集から初期の主要作品である『ノーサンガー・アビー』(*Northanger Abbey*)への流れ、また初期の書簡小説の『レイディ・スーザン』(*Lady Susan*)から叙述法による『分別と多感』(*Sense and Sensibility*)や『自負と偏見』(*Pride and Prejudice*)、そして最後の作品である『説得』(*Persuasion*)といった代表作が完成に至る経緯を、極めて綿密に考察している。

オースティン小説の成立と変遷と発展ということを一方で常に意識しながら、数ある先行研究の中でも特に主要な研究をきちんと踏まえたうえで、テキストの一字一句を決しておろそかにしない精読に徹して個々の作品を丹念に読み解いている。

本論文は独創的であるという見地から見て特筆すべき点が4点認められる。まず一番目は、オースティン学者である David Cecil の言葉を借りれば、「オースティンは小説技法の達人として光彩を放っている」と言われるが、そのような技法の確立と変遷と発展を代表作6作のみならず未完小説やいわゆる小品と呼ばれるものまで多岐に渡って創作年代順に一直線上に捉え、ほぼ全作品にわたって論じている点である。

ただし、第一章で取り上げている『説得』という作品は、湯谷氏が大学院時代に修士論文で取り上げた作品であり、この作品との出会いがきっかけでオースティン研究がスタートしたということもあり本論文の第一章で取り上げたということである。これまで多くの研究者の間で看過されてきたが、代表作を生み出すに至った未完小説や、オースティンが家族を楽しませるために少女時代に書いたバーレスク(文学作品を茶化したパロディ)や創作ノートといったマイナーな小品に至るまで、入手できるものはすべて取り上げて手堅く検証している。そういうものの中に作家としてのオースティンらしさの萌芽が認められるからだと言及する。未完小説はその後の代表作に繋がる実験的作品であり、その後の可能性が見極められたらその手応えをもとに新たな作品を書き始めている故、未完小説も研

究上取り上げるだけの価値が十分あると指摘している。

具体的には、第一章から第十章までは、特に代表作品を生み出すに至った未完小説やマイナーな小品を援用して主要な作品を考察しているが、こういうものは例外なく彼女の創作の転換期に（書簡体から順を追って述べる叙述法へ、活動的なヒロインから控えめで受動的なヒロインへと）書かれているという事実を慧眼に導かれた洞察力で明らかにしている。批評家や読者にほとんど顧みられることのなかった主要作品の下敷きとも言える未完の、しかも概して駄作と思われるような物語の中に、オースティンの傑作につながるあらゆる要素が潜んでいることを丁寧かつ緻密に論証した意義は大きいと思われる。

二番目は、オースティンの小説技法の発展のために作家自身が用いた手法を検証するために、全作品を俯瞰しつつ個々の作品と真摯な姿勢で対峙し、新たな視点からテーマを見出し、さらにスケールの大きな研究へとレベルアップさせていることである。

具体的には、第十一章から第十五章までは、小説に描かれた「親と娘の関係」、「古典主義とロマンティシズム：対立する二つの概念の融合」、「風刺作家としてのオースティン」、「オースティンと読書」というようにテーマをさらに拡大し、多角的な視点から個々の作品を分析している。オースティンは18世紀と19世紀のどちらに帰属するのか、換言すれば、古典主義とロマンティシズムのどちらに属する小説家であるかというのは、批評家の間で意見が分かれる問いである。湯谷氏はこの問題に取り組んだ後、古典主義とロマンティシズムという対立する二つの概念を、代表作であり最後の作品でもある『説得』において見事に融合させていることを第十五章で明らかにしている。

三番目に特筆すべき点は、湯谷氏は国内にとどまるだけでなくオースティンのゆかりの地も含めて、イギリスへの度重なる出張を通じて貴重な情報や資料を入手したことである。日本オースティン協会の設立に貢献し、長年の研究活動と実績により名誉ある永年会員として認められたイギリスの **The Jane Austen Society of the United Kingdom** 主催の国際会議に5回出席している。オースティン学者の研究発表やシンポジウムや特別講演を通じて、さらには会議の場から離れて生誕の地やゆかりの地への訪問を通じての交流などから学んだことや、日本にいれば決して入手できないような二次資料にいたるまで、様々な交流や貴重な資料から得られた有益な情報を基軸において、着実に論を展開してオースティンの作品と実像に迫っている。これらはすべてオースティン研究者としての湯谷氏の強みであり、海外出張時の優れた研究成果は特に本論文の第十七章から第二十章に掲載された論文で明らかにされており、関係学会においても評価が高い。

四番目は、近年湯谷氏はオースティンの小説を文学と心理学の両面からアプローチして、学際的な研究にまで発展させていることである。オースティンの小説を精神分析的立場から論じた論文は国内にほとんど例がなく、極めてユニークでありチャレンジングなアプ

ローチになっているが、これは本論文の第十六章に掲載されている。今後英文学者がこういうアプローチで研究を始めたら、新たな視点から文学作品を解釈する可能性が期待されるので、こういう学際的な研究をこれからもさらに発展させていきたいという湯谷氏の文学研究者としての情熱が伺える論文である。

博士論文の独創性と研究領域への貢献度として以上4点を高く評価したい。

第十三章の「ジェイン・オースティン：風刺作家としてのモラリスト」という論考は論文全体のタイトルにもなっているが、これはオースティンという作家の特徴を端的に捉えた表現である。湯谷氏によれば、モラリストとは決して道徳主義者という意味ではなく、「人間性の探究者」を意味するという。オースティンが「人間性の探究者」であることは、作者自身が『自負と偏見』という作品の中で明らかにしているとおりである。彼女の小説には、言葉や状況にもアイロニーや風刺が認められることを具体的に例証して、オースティンは風刺作家としてのモラリストと称するにふさわしいと結論づけている。

最後に今後の課題として次の3点に言及しておきたい。一つ目は、精神分析学的立場から論じるというのは斬新かつユニークなアプローチであるが、英米文学界での認知度は未だ低いことは認めざるを得ない。20世紀以降に創作された現代文学にはある程度適用できるかもしれないが、19世紀、あるいはそれ以前の時代に生きた作家の文学にはたして有効かどうかは今後の研究の成果を待つしかないだろう。二つ目は、本論文は新たな書き下ろしではなく、湯谷氏の実に30年にも及ぶ研究成果の結晶である20編の論文に加筆修正を施したものであるので、いわゆる若書きと言えるものも含まれている。その点初期に書かれた論文の中には、学術論文としての完成度がやや低いものもごく一部含まれていることは否めない。三つ目は、博士論文の構成のことである。博士論文は全二十章から成り立っているが、論じるテーマを区分するという意味でも、二部、あるいは三部立てにして全二十章から成り立っているとしたほうが全体としてまとまりが良かったのではないか、という意見も出された。

以上のような課題は残るが、総合的に判断して、本論文が達成した学問的独創性と研究領域への貢献度はいささかも減じるものでないことは言うまでもない。

よって本論文審査委員会は、本論文を博士（英文学）としてふさわしい論文であると判断する。

### **試験結果の要旨**

本論文についての公開口頭試問は、大学院関係教員、その他の教員、非常勤講師、大学院生、学外の関係者等 11 名の出席のもとに、平成 31 年 2 月 4 日(月)13 時から概ね 2 時間近くにわたり行われた。最初の 60 分程度は論文の概要についてパワーポイントを用いて説明があり、その後十分な時間をかけて論文細部にまで及ぶ質疑応答が 4 名の審査委員とフロアからの 1 名との間で活発に行われた。論者の応答は的確であり、残された課題についても十分な理解を示し、今後の展望についての積極的な意欲を確認することができた。以上のように、口頭試問の結果は満足すべきものであった。

### **学力確認の結果の要旨**

湯谷氏は日本オースティン協会設立に貢献し、その当時からの学会員であり、長年の研究活動と実績によりイギリスの **The Jane Austen Society of the United Kingdom** の名誉ある永年会員として認められたことから明らかなようにエスタブリッシュされた研究者であり、学位論文の内容に関する公開の口頭試問においてもすでに満足すべき結果を示しているため、学位論文審査委員会は改めて学力確認のための試験は不要であると判断した。

### **学位授与の可否に関する意見**

以上の所見により、本論文は博士（英文学）の学位を授与するに値すると認められる。